

(報告書)

山地農耕民ハニにおけるたばこの贈与・交換についての民族誌的研究

研究助成者 阿部朋恒 ((首都大学東京大学院) 社会人類学)

1. 研究目的

本研究の目的は、中国雲南省とその周辺地域の山地において棚田耕作を営む民族ハニを対象とした民族誌的調査を通じて、たばこの贈与・交換を含む広義の喫煙行為の社会的な意味を、村落における社会関係との関連において明らかにすることである。

ハニ族は由来複数の村落を統合する“くに”のような広域的な社会組織をもたず、代わりに親族関係や精霊信仰にまつわる役職の威信を軸とする村落内部の序列を発達させてきた。この序列は、村落における暮らしのあらゆる場面で意識されており、さまざまな対面的状況を統制している。とはいえ、それは必ずしも固定的、明示的なものではなく、場所や顔ぶれなどの要素に応じて、場面ごとに暫定的に現れるものである。このため、たばこの贈与・交換は、その場に居合わせた人々のあいだの関係性に対する互いの解釈を確認し合い、コミュニケーションの土台を築くための契機ともなっている。

雲南に住む山地民族の喫煙習慣としては、竹筒をくりぬいて作った水パイプの使用がよく知られてきたが、現在では山地村落部にも工場生産された紙巻きたばこが広く普及している。ハニ族の村落においても、紙巻きたばこが社交の場で欠かせない道具となっている。ライターひとつで手軽に吸える紙巻きたばこの登場は贈与・交換の形式を根本的に変えるものであり、たばこそのものの社会的役割にも影響する趨勢であったはずである。しかしこれまでのところ、ハニ族はおろか他の山地民族を含めたとしても、「伝統」のイメージに沿わない紙巻きたばこの喫煙習慣に論及した研究はほぼ皆無であった。

こうした状況に鑑み、本研究では喫煙様式の転換にも留意しつつ、2011年9月より現在まで継続している現地調査で得られた資料をもとに、ハニ族の村落生活における喫煙の諸相を、その社会的文脈に照らしながら検討していきたい。

2. 研究方法

本研究を進めるうえでの方法は、ハニの村落における現地調査およびそこで得られるデータの分析を主とし、補足的に文献資料を利用した。

(1) 文献調査

文献の収集は、雲南省昆明市の雲南大学、蒙自市の紅河学院の図書館および紅河州政府図書館を中心として行い、一時帰国中に首都大学東京と国立民族学博物館の図書館でも行った。喫煙習慣に関連する文献は、雲南全体を対象を広げて収集に努めたが、ごく限られた数しか該当しなかった。ハニ族文化に関連する先行研究、および口頭伝承や民話に関連する資料の収集は、中国語、日本語、英語およびハニ語を対象として広く行った。特に役立ったものとしては、1950年代に中国の少数民族地域で大々的に実施された一連の“社会歴史調査”報告書と、1960年代以降にタイで調査を行った若干名の欧米人類学者による著作と論文が挙げられる。また1980年代末以降現在までに中国語で書かれたおびただしい文献については、2000年に日本の人類学者稲村務と紅河学院の楊六金（当時は紅河州民族研究所所属）によって作成された文献目録を参照しながら、主だったものを購入した。

(2) 現地調査

2011年9月より現在まで、継続して雲南省南部のハニ族イ族自治州における長期調査を実施している。とりわけ、長期調査許可を取得した2013年4月以降は、同州紅河県洛郷村のハニ族村落スチャプ村（仮称）における住み込み調査を続けている。本研究で提示するデータは、とくに言及のない限りこの間行った参与観察にもとづいている。なお、2011年9月以降は同州内の紅河学院の国際ハニ／アカ研究所に訪問学者として在籍し、2013年4月以降は同大学を通じて雲南省教育庁発行の長期調査許可を取得している。ハニ族村落での調査使用言語はできるかぎりハニ語を用い、中国語雲南方言を補足的に用いている。

3. 研究計画と実施状況

当初の研究計画としては、2013年4月に雲南省内での文献収集を完了させたのち、ハニ族村落で田植えが終わり村落儀礼の集中する5月中旬以降は、広域的な村落調査を実施、夏季に一時帰国して審査員とのディスカッションに望み、年度後半は再び現地調査を中心に行う予定であった。しかし、助成研究を開始してすぐの2013年4月にかねてより申請を続けていた調査許可が取得でき、以降ほとんどすべての期間を上述のハニ族村落での滞在に充てることにしたため、計画は大幅に変更せざるを得なかった。大きな変更点は、8月のディスカッションおよび過年度報告会に出席することができなかったことと、広域的な調査の実施計画が縮小されたことである。しかし、ひとつの村落に住み込んでの長期フィールドワークが可能となったことにより、結果としてはむしろ研究の進展自体が大幅にはかどったといえる。

4. 結果

4-1. ハニ族における喫煙の歴史記憶と現在

たばこの贈与・交換に関する具体的な描写に入る前に、ここではまず先行研究を瞥見してその傾向を把握し、その不足を補うかたちで調査村落での調査データを用いて喫煙習慣の変化を明らかにしていきたい。

4-1-1. 先行研究の整理

「雲南十八怪」とは中国では誰しもが知る言葉だが、そのなかに数えられる不思議のひとつに、「竹筒がたばこを吸う水パイプになっている（竹筒能做水烟袋）」というものがある。もの珍しさが書き手にも深い印象を与えているのか、とくに雲南の文化について紹介する一般読者向けの雑誌記事には竹筒水パイプの使用を取り上げているものが散見され、その多くはこれを雲南における少数民族の「伝統」として扱っている [朱忠 2012 ; 张家荣 2004; 2011]。学術的に雲南の喫煙習慣を扱うものとなると極端に少なくなるが、たとえば水パイプの制作過程を紹介したうえで、これを民族文化を表象する観光資源として活用することを提案する張建林 [张建林・孙华・王阵 2012] など、やはり水パイプはここでも少数民族の習慣と結び付ける記述がみられる。ハニ族の喫煙習慣を議論の中心に据えた論考は管見の限り皆無だが、異なる主題のもとで書かれた民族学的研究のなかに、たばこに関連する言及を見出すことはできる。たとえば、水パイプに込めていた使用済みの水に煤を混ぜて服用する民間療法の紹介 [何斯强編 2001 :313]、現金作物としてのたばこの栽培状況の概説 [陈玉龙 1996 :819 ; 姜红 2011] などだが、そこからハニ族の喫煙の実態を窺い知ることはできないといっていようだろう。

なお、雲南産のたばこは全国に名が知られていると同時に、産業としても相当な経済規模を持っているため、たばこの生産史や生産技術史に関する文献は数多く存在する。本稿の主題とは異なるため詳述は避けるが、島 1969 ; 兼重 2006 ; 王天培 2006 ; 张立平・刘子荣・王景萍・李美材・黄初启・胡裕琳 1998 ; (不明)2013 にもとづいて大まかな流れをまとめると、以下ようになる。雲南省でたばこの大規模生産がはじまったのは 20 世紀初頭であり、中葉までには名産品としての知名度が確立した。解放後の中国は雲南のたばこ産業の発展に力を注ぎ、栽培と加工の両側面での技術的改良と生産機械の導入が続けられた。その結果省内には紅河集団や紅塔集団など中国を代表するたばこ製造企業が育ち、近年では雲南省の税収の大部分を占めるに至っているという¹。

ここでは、ハニ族を含む雲南人の喫煙習慣についての文献研究において、竹筒で作

¹ たとえば、1998 年にはたばこに由来する税収は 380 億元で、全省の総税収の 80% を占めている [云南省档案局社会利用处 (選編) 2013: 18]。

られた水パイプの使用が過剰に表象される一方で、少数民族の「伝統」イメージに沿わない紙巻きたばこについてはほとんど捨象されてきたことを確認した。ハニ族の暮らす農村における喫煙習慣は変化してきているにもかかわらず、既存の文献からその実態を窺い知ることはできないとあってよい。まずはこの点を補うため、次項ではハニ族村落における喫煙習慣の変化について、現地調査にもとづく観察と歴史記憶をめぐる語りにもとづいて整理したい。

4-1-2. スチャatap村における喫煙の歴史記憶——市場化以前のキセルたばこ

スチャatap村は、雲南省南部を東西にはしる哀牢山脈の山腹、標高 1600m ほどのところに位置する村落であり、165 世帯 650 人余りの村民すべてがハニ族である。ハニ族の村落はふつう森林や耕作地を挟んで独立した立地を備えているが、スチャatap村もこうした典型に違えず、谷側に拓いた棚田と棚畑で主食となる米および野菜をつくり、村落のなかでは水牛や豚、鴨、鶏といった家畜を育て、さらに山側に広がる森林では薪や野草が採れるため、日常的な食に関しては自給に近い状態が保たれている。とはいえ、衣料品や食器、洗濯に使う金属製のたらいなど日用品の多くについては、村から徒歩一時間ほど山道を登ったところで毎週土曜日に開かれる定期市で購入してきた既製品が使われるようになって久しい。また、1990 年代半ばに送電線が敷かれてからは電灯や炊飯器、テレビなどの家電製品も使われるようになっており、現在では村落での暮らしも外部市場におけるモノやサービスの調達を前提として成り立っているといえる。現金収入の必要が高まるにつれ出稼ぎも一般化している。



写真 1 スチャatap村遠景



写真 2 滞在先の部屋

では、やはり水パイプを用いた喫煙習慣の「伝統」が徐々に薄れていき、大量生産された紙巻きたばこにとって代わりつつあるという語りは正しいのだろうか。ことスチャatap村の場合に限っていえば、このような消滅の語りにはいくつか留保すべき点が残るようである。ただし、疑問が付されるのは水パイプという「伝統」が将来廃れ

ていくのかどうかではなく、そもそも水パイプを用いた喫煙習慣がスチャタブ村の人々にとってどれほどまで「伝統」であったのかという点についてである。

早々に種を明かしてしまうようだが、スチャタブ村の人々の喫煙にまつわる記憶の語りにしたがえば、水パイプを使い始めたのは「国民党のころ (*Golmiqdanq tyulba*)²⁾」³⁾つまり中華民国時代の 20 世紀前半であり、併せて刻みたばこを米や家畜と交換して入手するようになったのだという。それ以前は、村の周辺で栽培した「ヤホホニユ (*yahyul hyulniu*)」と呼ばれる植物の葉を天日で乾燥させて荒く砕き、竹の根に熱した針金で穴を通してつくるキセルで吸っていたのだとされている。ヤホホニユは「ヤホ」つまりたばこの一種ではあるものの、市場で販売されているものとは異なっており、この地域のハニ族のみが栽培しているローカルな品種として位置づけられている。スチャタブ村ではヤホホニユの栽培は現在でもごくわずかながら続けられており、私も一度だけこれをキセルで喫煙したことがあるが、酩酊感をともなう吸い口の感覚から、やはりおそらくはたばこの一種だろうという印象を覚えた。

また、少なくともこの地域のハニ語には「伝統」と完全に互換可能な語彙はないが、類似する表現として、「祖先 (*aqpyuq aqbol*)」という言葉形容に用いることで、古くから継承されてきた正統的なモノや習慣をそうでないものごとから峻別する言い方がある。スチャタブ村の人々は、祖先供養を行う際に供物としてたばこを捧げないことを指して「祖先はたばこを吸わない (*aqpyuq aqbol yahyul ma suv.*)」という表現を共有しており、ヤホホニユを含めた喫煙習慣が祖先の時代にまでさかのぼれるものではないことを認識しているのである。広くハニ族には、祖先の名を連ねてスミオと呼ばれる最初の人間にまで至る系譜が口承されており⁴⁾、スチャタブ村でも 60 世代以上にわたる系譜を暗誦している人が少なくない。かつてこの地域にいた土司が衣装を改めるよう命令を出したこと、谷向かいに並ぶ二つの村を拓いた人物が兄弟同士であったこと、そうした歴史は口承される系譜のなかに位置するいずれかの祖先の名とともに記憶されている。われわれが「伝統」としてさまざまなものごとを安易に無時間化しがちなことに比べれば、ハニの歴史記憶は精緻に分節化しているといえる。ヤホホニユという最も古い様式の喫煙習慣ですら「祖先」のものではないというローカルな認識が、信頼に値するといつてよいと考える所以である。

²⁾ 本稿ではハニ語の語彙や表現を、() つきのイタリック体アルファベットで表記する。綴りについては、紅河州緑春県の方言にしたがって 1950 年代に考案された転写法をもとに、この地域の方言に合わせてやや私が工夫を加えたものである。

³⁾ スチャタブ村の人々の歴史語りには、「昔々 (*galhhu miltei*)」、「祖先のころ (*aqpyuq aqbol tyulba*)」、「○△ (系譜上の祖先の名前) のころ (○△ *tyulba*)」、「国民党のころ」、「共産党のあと (*Gonlcaldanq naolhao*)」、「現在 (*niao'aol*)」という時代区分がしばしば登場する。

⁴⁾ 直近数世代を除き、ふつう記憶されるのは父系祖先の男性のみである。

4-1-3. スチャatap村における喫煙の現在——水パイプから紙巻きたばこへ

現在では、刻みたばこと紙巻きたばこを問わず村落生活のなかで消費されるたばこのほとんどが大量生産された商品であり、土曜の定期市、あるいは村人が農業の片手間に自宅で開いている雑貨店で購入される。たばこの喫煙方法には、①水パイプを用いて刻みたばこを吸う、②水パイプで紙巻きたばこを吸う、③紙巻きたばこを直接吸う、の三通りがみられる。この地域のハニ語では、水パイプは「ボドゥ (*baqdu*)」、たばこは刻みたばこと紙巻きたばこの区別なく「ヤホ (*yahyu*)」と呼ばれる⁵。喫煙行為については、上述の①～③のすべてを含めて「ヤホシュ (*yahyu suv*)」と言うことができるが、水パイプを用いる①と②を指す場合には「ボドゥシュ (*baqdu suv*)」というもうひとつの表現が用意されている。少なくとも語用のレベルにおいては、紙巻きたばこか刻みたばこかというたばこそのものの加工形態は捨象され、吸引器具としての水パイプを用いるかどうかという喫煙様式の違いがより強調されているのである。味わいについては一般に水パイプを用いた方がよいとされ (表 1 参照)、また紙巻きたばこを直接吸うと「喉を傷つける (*kaqbo bi kyul*)」ため、病気を患っている人や老人は、たばこを吸うならば水パイプを用いた方が身体への負担が軽いとされている。さらに、紙巻きたばこは水パイプよりも余計に金がかかると考えられているにもかかわらず、現在ではもっぱら水パイプのみを吸う人は少なく、頻度を比較すれば紙巻きたばこを口にするものが多い (表 2 参照)。



写真 3 水パイプと紙巻煙草⁶

⁵ とはいえ、とくに紙巻きたばこと刻みたばこを区別する必要があるときには、漢語を借用してそれぞれ「ヂーイェン (*ziiqyei*/紙烟)」、「マオイェン (*moqyeil*/毛烟)」と言うこともできる。ただし、この地方のハニ語の音韻体系には連続母音が少なく、そり舌音が明瞭でないため、「ジイェ」、「モイェ」のように聞こえる。

⁶ 本研究では、プライバシー保護及び研究倫理遵守のため、研究目的での使用・公開の許可を本人からとっていない写真については掲載を避ける。この写真に写っている二人はそれぞれ私ととくに近い間柄であり、調査目的と写真の用途についても理解していただいている。

年齢	水パイプ	紙巻きたばこ	総数	年齢	水パイプ	紙巻きたばこ	総数
10代	0	2	2	10代	0	2	2
20代	5	2	7	20代	0	5	5
30代	13	2	15	30代	2	13	15
40代	10	3	13	40代	5	8	13
50代	8	3	11	50代	5	6	11
60代	7	1	8	60代	4	2	6
70代以上	3	0	3	70代以上	1	1	2
計	46	13	59	計	17	37	54

表1 質問：味わいはどちらの方が良いか⁷ 表2 質問：喫煙の頻度が高いのはどちらか

味わいについて評価の劣る紙巻きたばこを選択する理由について問えば、ほとんどの場合、端的に便利だからという答えが返ってくる。これはもちろん、水パイプと比較しての話である。水パイプは標準的なサイズで長さ 80cm、直径 20cm ほどの大きさがあるため、喫煙する状況が制限されてしまう。たとえば、農作業に出る際に鍬や背負子などの農具とともに持ち歩くのは面倒であり、また灌漑水路から必ずしも水パイプに詰めるための澄んだ水が手に入るわけではない。村の近くを散歩しながら水パイプを鳴らしている姿はしばしば見かけるものの、耕作地にまでこれを持って出る人はさほど多くはない所以である。確かに手軽さの点では、ポケットに入れて持ち運びでき、ライターひとつあればどこでも喫煙できる紙巻きたばこに軍配が挙げるといえるだろう。

紙巻きたばこがスチャタブ村で吸われはじめた時期はさほど古い話ではなく、改革開放後しばらく経った 1980 年代半ば頃からだったとされる。当時店頭に並んでいた銘柄は「小春城」、「宝石」、「金沙江」、「紅梅」などであり、前三者の価格は一箱 4～5 角、「紅梅」は最も高級とされ一箱 8 角だったという。現在村内の雑貨屋で販売されている紙巻きたばこと比較すればおよそ 10 倍以上に価格が上がっていることが分かるが（表 3 参照）、かつては出稼ぎの機会も少なく現金収入の手段が限られていたため、いまの方が安く感じられるという。信頼できる統計がないため正確なことは言えない⁸が、現在スチャタブ村の人々は現金収入のほとんどを出稼ぎ収入に頼っており、州内の建設現場で働く男性で月におおよそ 2,000～3,000 元、鉱山労働で 2,500 元～3,500 元、漢語がある程度できる若者であれば沿海都市部の工場まで出てそれ以上の賃金を得ることも不可能ではない。彼らが手にする出稼ぎ労働の機会と賃金水準は過去少なくとも二十年のあいだ上昇を続けているが、その背景にはこの間急速な発展を遂げた中国経済全体の動向があったことは間違いない。

⁷ スチャタブ村では基本的に用紙を配る形式のアンケートは行っておらず、統計データはすべて対面式の聞き取りによる。理由としては、スチャタブ村の漢語識字率が低いことと、調査許可で認められる範囲を超える可能性があるからである。

⁸ 政府発行の各種統計には村落や村民委員会単位の平均収入が記載されているが、出稼ぎ先で得た賃金を正確に反映させずに計算しているため、実態よりも極端に低い数値となっていることが多い。

銘柄名	村内価格	定期市価格
紅山茶	5	35
紅梅	5	40
紅河	7	60
紅河88	11	100

表3 村内で販売されている紙巻きたばこの銘柄
(単位：人民元) ※定期市価格は1カートン



写真4 販売されている紙巻きたばこ

現代にあっては、地政学的にも経済的にも最周縁に位置するといえるスチャタプ村の暮らしですら⁹、少なくとも国民国家規模の近代化のプロセスと分かちがたく連動している。ハニ族の社会もやはり不可逆な変容のなかにいることは確かだが、水たばこを「伝統」とみなした消滅の語りが見誤りであったように、喫煙様式の変化は必ずしもたばこが担う社会的役割の喪失を意味するものではない。次節からは、たばこの贈与・交換に注目しながらこのことについて検討していきたい。

4-2. スチャタプ村におけるたばこの贈与・交換

前節(4-1)では、スチャタプ村における多様な喫煙のあり方について歴史的な変化を跡付けるかたちで検討し、①キセルでローカルに栽培されたたばこを吸う、②水パイプを用いて刻みたばこを吸う、③紙巻きたばこを直接吸う(あるいは水パイプを用いて紙巻きたばこを吸う)という喫煙の様式が、互いに重なり合いながらも数字の順序に沿って緩やかに主役の座を譲ってきたという展開を提示した。歴史記憶の語りと参与観察にもとづいて描いたこのような見取り図は、ハニ族の喫煙習慣としてはもっぱら水たばこを「伝統」として表象するに終始してきたこれまでの民族誌的記述の不備を、喫煙の多様性と連続性を提示するかたちで補うことができよう。

ここからはさらに、ハニ族村落において近年ようやく主役の座を獲得しつつある紙巻きたばこについて、それがすでに社交の道具として欠かすことのできない役割を獲得していることをみていく。前節では、味わいにまさる水パイプよりも紙巻きたばこが選好される理由として、手軽に喫煙できるという利便性が挙げられることを示した。しかし、喫煙の場面をつぶさに観察すれば、小さくそのまま吸えるという紙巻きたばこのモノとしての特性は、喫煙の簡便さだけにとどまらず、社交の場での交換に適しているという点においても利点を発揮していることが分かる。多くの嗜好品がそうで

⁹ 雲南省南端のこの地域はまさしく、国家の統制から最も遠い一帯としてジェームズ・スコットが広めた(スコットはファン・スヘンデルによる造語であるとしている)地域概念「ゾミア」のなかに位置する[スコット 2013]。

あるように、ハニ族の村落生活においてもたばこは気持ちを落ち着かせ、人間関係を円滑に進める潤滑油の役割を担っている。ことそこにおいては、ゆったりとした雰囲気演出する水パイプの方が優れているかもしれないが、水パイプはほぼすべてのイエに1~2本ずつ用意されているとはいえ、大勢が集まる場では回しのみにならざるを得ない。一人がこれを占有する時間も5~10分と比較的長くまた譲り合う際にはふつう年配者が優先されるため、畢竟、交換の輪は狭くなりがちである。一方で、紙巻きたばこの交換が観察される頻度は相対的に高く、通常同時にその場にいる全員に配られるため、交換の裾野が広がりやすいのである。

本節では以下、たばこの贈与・交換が現在のハニ族村落においてどのような社会的文脈に位置づけられるかを確認したうえで、たばこの贈与・交換が行われる具体的な場面を描写していきたい。

4-2-1. ハニ族の村落における社会関係と共同体的規範

ハニ族の村落はほぼ例外なく個々に山林を拓いて建設され、俯瞰すれば広大な山地に村落が散在する格好になるため、由来複数の村落を統合する“くに”のような広域的な社会組織は現れなかった[Tooker 1996: 329-334; Kammerer 1986]¹⁰。また統治と被統治の関係にもとづく階層化もみられず、一般に平等原理の優越する社会とみなされてきたが、その代わりに主として親族関係や精霊信仰にまつわる役職の位階にしたがった威信を軸とする各村落内部の序列を発達させ、これを人々の社会生活を支える第一義的なメカニズムとして機能させてきた。典型的には①モピ（司祭）、ズエマ（頭目）、バジ（鍛冶屋）の三役職¹¹、②与妻と受妻を通じたりネーヅ間の非対称性、③系譜上の世代を中心とした社会関係であり、気のような目に見えない力の流れに沿って構築された関係性として解釈されることもある[Tooker 1996; 2012]。同様の社会関係は現在のスチャタブ村でもはっきりと観察でき、モピ（*moqipil*）は毎日のように儀礼の主宰を請われて村中を飛び回っているし、村で暮らす大人であれば村人同士の親族関係についてかなりの程度まで把握している。むしろ、そうした社会関係の網の目のなかにいなければ、しかるべき儀礼を行うことも、田仕事に必要な手伝いを得ることも難しいのである。

さらに、このような社会関係が整然と機能しているのは、日々の暮らしが「ヨリ

¹⁰ トッカーやカメラが念頭に置いているのは、基本的には彼女たちが調査を行ったタイ北部のアカ村落であり、哀牢山脈一帯のハニ族居住地域には中華王朝の明清期を通じて土司が置かれていた点でやや事情が異なるが、村落部への土司の影響力は概して低かったため、複数村落を統合するような存在ではなかったと考えられる。

¹¹ モピ、バジについては現在のスチャタブ村にも存在する役職だが、ズエマは新中国となったあと「幹部」（末端の役人）に置き換えられたのだという。この他、現在では村落儀礼を率いるアスアボ（*hhaqsii aqbol*）あるいはミグ（*milguq*）と呼ばれる役職が重要な役割を果たしている。

(*yolil*)」と総称される模範的な実践のあり方を参照して成り立っているからだといえる。ヨリは人間関係に直接的にかかわるものだけではなく、たとえば十二支を用いた暦法や牛と豚にやる餌の違い、鍬の柄の握り方、箸の置き方まで、村落生活におけるあらゆる実践にかかわっており、社交の場におけるたばこの交換に関する規範もまたヨリの範疇に数えられるものである。ヨリは、規範、礼儀、道理などとして翻訳可能¹²な概念であり、文脈に応じてさまざまな意味で用いられ得る。たとえば、儀礼ごとに用意すべき犠牲の種類などはすでに祖先の時代から決まっているため勝手に変えることはできないとされており、こうした規範に近い意味でのヨリをあえて指すときには、「祖先のヨリ (*aqpyuq aqbol e yolil*)」という言い方がなされる。モノの交換に関して例を挙げれば、老人が亡くなった際の葬儀では母方オジが山羊を持参する、同じ父系出自集団に属さない男性の婚儀に招待されたときには生卵をポケットに入れず布で包んで持っていき、といったものが「祖先のヨリ」であり、状況や相手を含めたやり方が具体的に明示されている。他方で、たばこの交換に関するヨリは礼儀に近い意味をこめて「現在のヨリ (*niao'aol yolil*)」と呼ばれるが、そこには具体的な手順までが明示化されているわけではなく、個々の解釈が入り込む余地が残されている。

ひと口にヨリとして言及される規範にもさまざまな位相があり、たばこの交換に関するヨリなどの「現在のヨリ」は、相対的に柔軟な解釈と実践へと開かれているといえる。ヨリによる規範化の水準の違いに注目することは、ハニ族の村落社会における人間関係のあり方を、その構造的側面と動的側面の双方に目配りしつつ捉えるために有効な視点となろう。ハニ族はいわば生来の文化相対主義者であり、たとえば漢族のヨリとイ族のヨリ、隣村のヨリとスチャタブ村のヨリがそれぞれ別様であり、文脈によってはこの「祖先のヨリ」と「現在のヨリ」が異なってくることを、至極当然のこととして捉えている。「祖先のヨリ」と「現在のヨリ」は必ずしも一致するものではないが、いずれも「われわれ」のやり方として、共同体的なアイデンティティと結び付けられているのである。繰り返して述べてきたように、かつて高い自律性を保ってきたとされるハニ族の村落社会は、この数十年のあいだに急速に進んだ人、モノ、貨幣、情報の流動化によって根本的にその様態を変化させつつある。そうした時代にあって、人々は「祖先のヨリ」にしたがった実践によって反復的に構造化されるような秩序を受け継ぎつつも、絶えず新たな社会関係のあり方を模索しているのではないだろうか。

この項では、モノとしては新参者の紙巻きたばこが社交の場で欠かせない道具となっていることについて、ハニ族特有の文化的背景と照らしながら検討した。続いては、たばこの贈与・交換が行われる具体的な場面について、二つの事例を通じて紹介していきたい。

¹² 漢語が話せる男性にヨリを漢語では何というのかと問うと、「規則 (規矩)」、「礼儀 (礼貌)」、「道理 (道理)」といった答えが返ってくる。

4-2-2. 事例一 命名儀礼後の宴席におけるたばこの贈与・交換

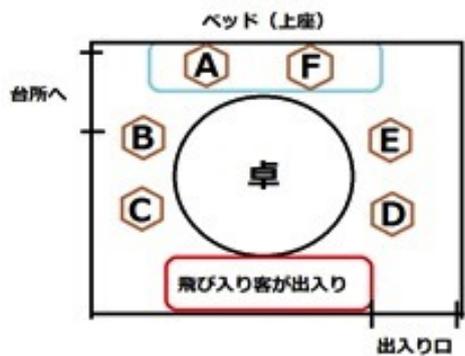
スチャタプ村に来て二か月ほど経った2013年6月のある日、周囲の村々に名の知られる薬草医であり、物置部屋を改装して一緒に住まわせていただいているミジュ氏(仮名)¹³に名付け親となってもらい、私はジュファというハニの名前を得た。ハニ族が世帯レベルで行う儀礼は、害をなす精霊を宥める「ニムウ (*nilmeeq wuvq*)」と、祖先を祀る「ホムウ (*hyulmeeq wuvq*)」に大まかに分けられ、この日行った命名儀礼は、祖先にかかわる後者の典型例のひとつである。朝早く雄と雌の鶏を屠って儀礼を無事終えると、名づけを通じて新たに擬制的親族となった村の男たちを招いての酒宴を催すこととなった。図表1は同席した男性と席次をまとめたものであり、この他に常時2~3人が出入りしていた。名づけの父とオジが着席しているベッドが上座¹⁴にあたり、私がある位置とその向かい側は本来ならば客を座らせるべき場所だが、この日は料理や酒を運ぶためホスト役の私が台所の近くに席をとっている。下座にあたる場所は空いているようだが、ここには通りがかりの男たちが入れ替わりで陣取っていた。



写真5 供物の準備¹⁵



写真6 祖先への供養



	擬制的親族関係	年齢
A	父(ミジュ氏)	70代
B	私	30代
C	兄(ミジュ氏の息子)	30代
D	兄	40代
E	兄	50代
F	オジ	60代

図表1 命名儀礼後の宴席の席次

¹³ 本稿では、プライバシー保護と調査倫理遵守のため村落名、個人名などに関しては一貫して仮名・仮称を用いる。

¹⁴ 一般的に、席次の上での上座は、イエのなかでも祖先を祀る棚がある場所を最奥に見立て、そこに近い方となる。

¹⁵ 写真5に映っている左の人物は私とごく近い間柄にあり、写真掲載については理解していただいている。右は私。

このとき準備したもののリストが表 4 である。現金で購入したものは鶏二羽、豚肉 2kg と刻みたばこ 250g、紙巻きたばこ 12 箱であり、うち紙巻きたばこ 2 箱分は途中で買い足したものである。犠牲とした鶏を除けば、紙巻きたばこにかかった金額が 82 元と最も多い。用意した紙巻きたばこの銘柄は「紅河」（通称は「大紅河」）であり、村で一般的に吸われている銘柄のなかでは中間的な価格帯のものである（表 3 参照）。昼前から日暮れどきまで約七時間にわたって続いた宴席を終えて確認したところ、用意した刻みたばこの三分の二程度と、紙巻きたばこ 6 本が残っていた。通りがかりの男たちが挨拶がわりに配った 47 本の紙巻きたばこを加味すれば、この宴席を通じておおよそ 80g の刻みたばこと、281 本の紙巻きたばこがその場で消費されたことになる。

品目	価格	購入・入手場所
雄鶏	60	知人
雌鶏	65	知人
紙巻きたばこ(紅河)12箱	82	村内売店
刻みたばこ(250g)	10	定期市
豚肉(2kg)	28	定期市
湯葉	5	定期市
こんにやく	—	知人
落花生	—	自宅貯蔵庫
各種野菜	—	菜園
各種香辛料	—	菜園

表 4 宴席で客に提供したものの一覧（単位：人民元）

※「紅河」については、二箱を買い足した際に 2 元分おまけしてもらった価格

まず客が来る前に料理、食器、酒を卓に並べて準備を整えておくが、このときに紙巻きたばこを二箱開封して卓の上に立てておく。これは卓を囲む人々に自由に吸ってもらうためのもので、誰でもいつでも断りなく手を伸ばしてよい。客が自前のたばこを懐から出して吸おうとする素振りをみせた場合などには、ホスト役がこの卓上に置かれた箱をとって差し出すため、招待客が自前のたばこを吸うことは基本的にはない。この日、卓上に置かれた箱から消費されたのは約 8 箱分であり、紙巻きたばこの消費量全体のおおよそ 6 割弱に上っている（表 5 参照）。相手に直接差し出すかたちでの交換に用いられた紙巻きたばこは、ホスト役をつとめた私と、同居している兄がそれぞれ二箱ずつポケットに入れていた計 80 本、および宴席の途中で顔を見せに来た村の男たちが配ったおおよそ 50 本である。卓を囲む状況でのたばこの交換が一对一で行われることはなく、必ずその場の全員に一本あるいは二本ずつ手渡しで配られる。このとき、はじめに差し出した相手から左回りに一巡するという順序が守られるべきとされるため、差し出す側の判断はもっぱら最初に誰に差し出すかという点に集約される。



写真7 事例一の卓上の様子
 ※左手奥側に「紅河」が開封して置いてある

差し出す側	消費本数	銘柄
ホスト(卓上に置く)	154	紅河
ホスト(直接差し出す)	80	紅河
飛び入り客(20代)	8	紅河
飛び入り客(30代)	9	紅河88
飛び入り客(30代)	9	紅河
飛び入り客(20代)	8	雲煙
飛び入り客(10代)	7	紅河
飛び入り客(20代)	6	紅河
計	281	—

表5 事例一で消費された紙巻きたばこの量

この日、私が紙巻きたばこを配ったのは合わせて6度であり、昼前に宴がはじまってから一時間以内と、午後3時過ぎに料理を追加して場を仕切り直した後の一時間以内に3度ずつ配っている。私は初回のみ上座に座るF氏から配りはじめようとしたが、F氏は「お前の父さんに吸わせてあげなさい (*nol e aqba a bi suv.*)」と固辞し続けたため、結局は向かって左側に座るミジュ氏から配りはじめ、F氏には一番最後に差し出すこととなった。F氏は私の名づけの父であるミジュ氏よりも年若い、ミジュ氏との名づけの父子関係を通じて私が属する「ツイエ (*cilyei*)」(父系出自集団)とは別の出自集団の成員であるため、身内となったミジュ氏よりも優先して敬意を示そうと考えたのだが、名づけの特別な日なのだからまずは新たな父親を敬いなさいという別の解釈が示されたのである。同じくホスト役を務めてくれていた兄は何も言わずにA氏から先にたばこを配っていたことに鑑みても、この場では私の立場がやや特殊だったのだと考えてよいだろう。このように、同じ卓を囲んでいたとしても、誰の立場を起点とするかによってその場の関係性には複数の読み解き方があり得るのである。

飛び入りでこの場に参加してきた人のなかには、顔を出したタイミングで皆にたばこを配っていた男が6人いた(表5参照)。傾向としては比較的若い人が挨拶代わりにたばこを差し出すことが多く、40代以上でこのようにして自前のたばこを配った人はいなかった。若者たちは相手にオジさん (*dalda*)、おじいさん (*aqbol*)¹⁶などと声をかけてから起立して恭しくたばこを差し出すが、受け取る側はたいていが鷹揚な態度で「うん」と返事をする程度である。こうしたやりとりからは、たばこの交換にはやはり目下の者が敬意を表す行為としての意味合いが強いことが示唆されているようである。

¹⁶ 「おじいさん (*aqbol*)」は祖父を指すが、広く二世代上の男性に対する敬称として用いられることもある。

しかしもうひとつ見逃してはならないのが、こうしてたばこを配った若者のうち半分の三人までもが、最初に私にたばこを差し出してきたという点である。このイエの家長¹⁷であり、卓を囲む人々のなかで最も年配であるミジュ氏から配りはじめるのがヨリに適っていることは、彼らも十分に承知しているはずである。にもかかわらず若輩の私にまずたばこを差し出してきたのは、おそらくひとつには、私がハニのヨリを知らないよそ者として捉えられていたからだと考えられる。ハニ族がもともと文化相対主義的な視点を持っているということは先にも述べたが、スチャタプ村でも外から来た人の行動に対してはかなり寛容な態度が示され、既存の社会関係の文脈から逸脱した対応がなされる。たとえば、村の視察に来た政府関係者や建築資材を運んできたトラックの運転手など、ハニ族以外の訪問者は常に上座でもてなされ、場合によっては女性が宴席に参加することすら許される。私も時としてこうした「破格の」もてなしに甘えることもあるのだが、この日はホスト役を務めていることもあって、差し出されたたばこをひとまず遠慮することにした。このときの場の反応は、スチャタプ村における社会関係の現在のありようを映し出しているようで興味深かった。たばこを受け取らずに「父さんから先に (*aqba, miltei.*)」と促すとどっと喝采がわき、たばこを差し出した若者は苦笑して引き下がるという場面が、三度ともに繰り広げられたのである。折角たばこを差し出してくれた彼らには少し申し訳なかったが、私はこの場では「ヨリを分かっている (*yolil hel*)」という好評価を得ることができたのである。

言うまでもなく、このとき本当に私の方が若者よりも「ヨリを分かっていた」わけではない。私より先にたばこを差し出してくれた若者たちが、上位世代に用いる親族呼称ではなく、より親しみを感じさせる「兄さん (*algo*)」あるいは「ジュファ」と名前前で声をかけてきたことから、彼らがとくに私に敬意を示そうとしていたのではないことは明白である。年配の同席者をさし措いて私に先にたばこを差し出すことは、上述のように私がよそ者である限りにおいて許されるし、ましてやよそ者である私がそれを受け取ったとしても咎められることではない。彼らは十分に「ヨリを分かっていた」うえでこのように想定し、敢えて私をよそ者として見立てることで、この場の関係性を既存の序列とは別の姿で描いてみたかったのではないだろうか。

ここで紹介したような祖先に関する儀礼後の宴は、村落の暮らしのなかでもハレの場であり、既存の社会関係にしたがった行動が普段よりもやや強く要求される場面である。本項の事例からは、そうした場面においてはたばこの交換が序列の論理に沿って整然と読み解かれ得ること、しかし後半的一幕のように、そこに揺さぶりをかけるような実践も同時に観察できることが確認できる。

¹⁷ ハニ語ではソショアダ (*soqxol aqdal*) と呼ばれ、独立して祖先を祀る儀礼を行うことのできる社会単位を代表できる人物とされる。

4-2-3. 事例二 葬儀後の宴席におけるたばこの贈与・交換

続いて紹介するのは、村落儀礼を除けば最も大規模な宴である、葬儀¹⁸にともなう酒席の場面である。スチャタブ村の周辺にはひとつの母村から派生した兄弟村が4カ村あり、おおむねその範囲内で葬儀があると、とくに招待されていなくとも出棺の日の宴席に参加してよいとされている。正式な招待を受けずに酒席目当てで葬儀に参列することは単に「牛肉を食べに行く (*niuxaq zaq lil*)」と呼び習わされており、気軽に集まってくる周縁的な客が大多数を占めていることから、前項で紹介した場面に比べて「祖先のヨリ」の拘束力が低い状況が呈される。以下で紹介するのは、2013年6月に「牛肉を食べに行った」際の事例である。

この日葬儀が行われたのは、徒歩20分ほどの距離にある隣村であった。昼過ぎにスチャタブ村の男たち三人と連れ立ってこの村へと向かい、出棺の様子を村はずれまで見守ったあと、宴席に参加したのは午後三時頃から日暮れ前の午後六時半頃までだった。近隣の村々から集まった客は数百人にも上るため、宴は村中に分散して行われる。私たちが訪れたイエでは卓が三つ準備されており、屋内に並べられた卓はこのイエの主人と年配の来客が席を占めていたため、私たちは中庭に出された卓に席をとった。同席者はいずれも周辺の村から集まってきた客で、私にとってはスチャタブ村から同行した三人を除く全員が初対面だったが、年齢が近かったためか席次にも気を使わず、ざくばらんな雰囲気酒盛りがはじまった。

着席するとすぐに同席者同士でのたばこの配り合いが始まり、ひと段落した頃には、受け取ったまま吸いきれないたばこが茶碗の脇に並びはじめていた。差し出す際にはやはり必ず左回りで一巡りする順序が守られていたが、たとえば湯を沸かせる面白い話をした男に誰かが勧めるといったように、誰から先に差し出すかについてはほとんど一定していなかった。他方で、卓上にははじめから葬儀を出したイエが用意したたばこ「紅河88」が封切った状態で置いてあったのだが、これには誰も手を付けずに残されたままであった。そのまま一時間ほど酒盛りを続けていると、葬家の親族が次々とたばこを配りにやってきた。彼／彼女たちは、大量の紙巻きたばこと飴玉を入れた竹かごを手に村中をまわり、簡単な挨拶を述べつつ、男性の卓ではたばこを、女性や子供には飴玉を配って歩いている。私たちが座っていた卓では、この日のべ38回もこうした挨拶が行われ、したがって手元にはそれぞれ38本ずつのたばこが残された。当然すべてを吸いきれるはずもないが、余った分は時折たばこと一緒に配られる空箱に入れて持ち帰ってよいとされている。

¹⁸ 盛大な宴が伴われるのは、孫の代がいる老人が亡くなった際のみである。葬儀に際しては水牛を犠牲とするのがしきたりであり、老人の葬儀の場合はおおむね3頭以上が屠られる。多いときは500人以上の客が「牛肉を食べに」来るため、村を挙げて遠方の客の宿泊や宴席の準備等の手伝いが行われる。

差し出す側	消費本数	銘柄
なし(卓上に置く)	0	紅河88
同席者(40代)	7	紅河
同席者(30代)	7	紅河
同席者(30代)	7	紅河
同席者(30代)	14	紅山茶
同席者(20代)	7	紅河88
同席者(20代)	14	紅河
同席者(20代)	7	紅河99
私(30代)	14	紅河88
葬家の親族たち	304	主に紅河
計	381	—

表 6 事例二で消費された紙巻きたばこの量



写真 8 事例二の卓上の様子
※配られたたばこを空き箱に入れている

以上の流れを前項で紹介した事例と比較してみると、ただちにいくつかの相違点が浮かびあがってくる。まずひとつめに、消費されたたばこの交換経路が異なっている(表 5、表 6 参照)。前事例では全体の約六割弱が卓上の箱から消費され、同席者が自前のたばこを懐から取り出すことはなかった。これとはまったく対照的に、この日卓上に置かれたたばこには誰一人として手を伸ばさず、同席した客同士が配り合ったたばこは計 80 本にも及んでいるのである。このことは、交換が具体的な行為として表現されることの重要性を示唆していると考えられる。命名儀礼後の宴席では、卓上のたばこを準備した私がある場でこれを吸うように促していたが、この日はいわばホスト不在で場が成り立っていた。葬家が用意したたばこは確かに卓上にあったが、これを贈与・交換の俎上に載せる具体的な行為が欠けていたため、誰も手を伸ばすことができず、代わりに同席した客同士でたばこを勧めあっていたものと解釈できよう。

さらにもうひとつ、たばこを誰から先に配りはじめるかについて、前項での事例ではあれほど大きな関心が払われていたにもかかわらず、同席者同士でたばこを交換する際にはほとんど誰も気にしていない様子であった。しかしだからといって、彼らがこの場に居合わせた私たちの関係性を読み解けないというわけでも、それをないがしろにしているというわけでもない。彼らも葬家の親族たちがたばこを配りに来たときには襟を正すようにして態度を一変させ、必ず同席者のなかの一人から先に受け取らせるよう気を配っていたからである。挨拶にまわってくる人たちのうち、亡くなった老人の息子や孫などは畏まった口上を述べるが、そうでなければ小さな子供を連れてまわっていることが多い。方々から集まってくる客に子供を紹介し、親族の顔を子供に覚えさせる良い機会だと考えられているためであり、たばこも子供の手から配らせている。そうした子供に対しては、たばこを差し出す際に正しい関係名称で相手に声をかけるように促し、助け船を出して親族関係を覚えさせようとさえしていた。そし

てそのことを、「子供にヨリを教えている (*ssaqquq a yolil mei.*)」のだと表現していたのである。

ここでは、「牛肉を食べに行く」つもりで別々の村からやってきた、比較的若い人々の集まりについて紹介した。そこでは既存の社会関係からは相対的に自由なたばこの交換が観察されたが、その同じ場においても、交換の相手が変われば序列的な論理が再び前面に現れ得るということが確認できた。

4-3. 考察

上記二つの事例では、それぞれ 291 本、381 本もの紙巻きたばこが贈与・交換が宴席の場でやりとりされており、とくに後者の例では、その場で吸いきれないほどの数が交換されていた。キセル、水パイプ、紙巻きたばこという喫煙様式の移り変わりについては本節前半で検証した通りだが、最も新しくこの村に入ってきた紙巻きたばこは、社交の場における贈与・交換に格好の道具として、すでに村落生活に欠かすことのできない役割を担っているといえるだろう。さらにそれは、単にモノとしての利用が定着したということにとどまらない。ヨリというローカルな規範概念を通じて、たばこの交換は、共同体的なアイデンティティと結びついた「われわれ」のやり方の一部を構成するものとして位置づけられているのである。ただし、「祖先のヨリ」と「現代のヨリ」が一致しない場合があるように、ヨリとは必ずしも固定的なものではないことにも留意が必要であろう。

事例一は、たばこの交換に関するヨリが既存の社会関係をそのまま反映するものとして捉えられている場面であり、よそ者としての私の存在を契機として別の解釈を示そうとした若者たちの試みは——私がそれに同意しなかったことによって——失敗に終わっている。事例二でも、葬家の親族の子供たちに「ヨリを教えている」場面ではその場の関係性を序列的に読み解くことが問題とされていたが、その同じ席において、その解釈をたばこの交換に反映しないという場面も観察されている。この事例については、同席していた男たちがヨリを守る／守らないという態度の転換を意識的に行っていたと考えるよりも、ヨリそのものが既存の社会関係と対照させるだけでは捉えられない輻湊性を備えていることを示唆しているのではないだろうか。現時点ではそれを検証するに十分な根拠を得るに至っておらず、今後さらに観察の幅を広げていくことを課題としたい。

謝辞

現地調査および調査許可取得にあたっては、紅河学院国際ハニ／アカ研究センターの楊六金教授、徐義強副教授はじめ先生各位のお世話になっている。またスチャタブ村では住まいを提供していただいている父と兄をはじめとして多くの方々から教を賜っており、彼らの協力なしに調査はうまく運ばなかった。この場を借りて感謝を述べたい。

末筆になってしまいましたが、本研究を遂行するにあたり研究助成を賜りました、公益財団法人たばこ総合研究センターに深く感謝申し上げます。

5. 引用文献

英語文献

Kammerer, Cornelia Ann, Gateway to the Akha World; Kinship, Ritual, and Community among Highlanders of Thailand, The University of Chicago, 1986, PhD Thesis.

TOOKER, Deborah E., "Putting the Mandala in its Place, A Practice-based Approach to the Spatialization of Power on the Southeast Asian 'Periphery'-The Case of the Akha", The Journal of Asian Studies 55, no. 2, 1996, pp.323-358.

———Space and the production of cultural difference among the Akha, Prior to globalization, Amsterdam University Press, Amsterdam 2012.

日本語文献

稲村努・楊六金、『国際哈尼／阿卡;研究資料目録(The International Bibliography on Hani-Akha)』筑波大学学内プロジェクト成果報告書、2000年

島一郎、「中国民族工業に対する「統税」の重圧——[1930年代]巻タバコ製造工業を例証として——」、『経済学論叢』、1969、18巻(1・2・3)、299～227頁。

ジェームズ・C・スコット、『ゾミア——脱国家の世界史』、佐藤仁監訳、みすず書房、2013年。
兼重努、「ケシアヘンから描く地域生態史——中国雲南省紅河県の事例研究——」、『2005年度生態史プロジェクト報告書』、447～460頁、2006年。

中国語文献

云南省档案局社会利用处（選編）、「辉煌之路启示录——档案中的云南烟草发展历程」、
『云南档案』、2013、5期、18～22頁。

何斯强(編)、『雲南民族村寨調查:哈尼族 绿村大兴镇俱别新寨』、雲南大学出版社、2001。
姜红、「云南省元江县尼戈哈尼族村寨日常生活中的交换行为分析」、2011、云南大学中国少数民族经济修士論文。

王天培、「云南烟标浓缩历史印迹(下)」、『中国包装报』、2006、4期。

张家荣、「云南水烟」、『西部大开发』、2004、Z1期、144～145頁。

——「云南水烟——烟文化的另类存在」、『人与自然』、第6期、102～106頁。

张建林・孙华・王阵、「云南西畴县木制水烟筒制作工艺调查」、『文山学院学报』、2012、4期、7～9頁。

张立平・刘子荣・王景萍・李美材・黄初启・胡裕琳、「中国云南烟草机械发展追溯」、『机械技术史』、1998年、00期、385～391頁。

朱忠、「忠云南的水烟筒」、『今日民族』、2012、12期、17～18頁。

陈玉龙、「让哈尼族商品意识对哈尼族社会经济的影响」、『首届哈尼文化国际学术讨论会论文集』、云南大学中国西南边疆民族经济文化研究中心、1996、814～826頁。

6. 英文アブストラクト

An Ethnographic study on Gift-Exchange of Cigarettes among Hani of South Western China.

Tomohisa ABE¹⁹

In this paper, It will be shown how exchange of cigarettes plays certain social role in Hani village life based on my two and a half years field work in Yunnan, China. Cigarette was getting popular thorough these decades in rural Hani village, although waterpipe is typical representation about “traditional” smoking style in prior works. It is very essential for male villagers to take part in gift-exchange of cigarette, in order to keep his social relationship active.

There are many customs called generally as “*Yolil*” which regulate various actions on everyday life in Hani village; how to grip a hoe, to deal with ashes on hearth, to conduct rituals and so on. Villagers seem to construct stable social relationship through the practical schema which *Yolil* provides, including how to hand cigarettes.

By illustrating two cases of ritual feasts, on the one hand, I would like to suggest that gift-exchange of cigarettes according to *Yolil* also constitutes social order in Hani village. However, sometimes deviation from existing order can also be seen. We may understand that they are living within and trying to adapt to dynamic social transformation.

¹⁹ Tokyo Metropolitan University